

「自分」というロボットを乗りこなす能力

『神経発達症圏の子どもたちを理解していく上で「実行機能障害」の理解は欠かせません。でも、この「実行機能障害」、イマイチモヤッとしていて理解しにくい用語でもありますよね。なので、ちょっとたとえ話をしながら補足してみます。

『さて、「実行機能」の定義は以下の通りです。

「目的を定め、それを達成するために、自分の持つ思考や感情や行動を、動かしたり、調整したり、抑制したりするプロセス」

『この「実行機能」に苦手さのある自閉スペクトラム症や注意欠如多動症（ADHD）、限局性学習症（LD）といった神経発達症圏の子には「やる気はあるのにできない」「スケジュール提示されているのに、分かっているのにやらない」「タイマーの提示をしても動けない」「朝の準備が遅い」といった、のび太君やクレヨンしんちゃんのような姿が見られます。

『たとえ話でしていくと、「実行機能」とは

『自分というロボットを乗りこなす能力』

とも言えます。外界を知覚してインプットして、思考して、行動をアウトプットすることでロボットは動きます。例えば、赤レンジャーがピンチの時に、巨大ロボットを操縦しているワタシは「赤レンジャーがピンチだ！」と知覚して、「走れ！！」とロボットに命じるのですが、ロボットは一向に動かない…みたいな。こういうことが続くと「ワタシはダメな操縦士だ…」と失敗体験が重なって二次障害につながっていきます（特に ADHD のある子は不安症は反抗挑戦性障害、躁うつ、チック症などにつながりやすいと言うことは以前に触れました）。エヴァンゲリオン好きな人には「神経発達症圏の人はシンクロ率が低い」と言えば一番伝わるでしょうか。

『もう少し踏み込んで、「何の不具合でアウトプットが上手くいかなくなっちゃうのか」というと、①意図的に注意をコントロールして保持する力 ②意図的に注意を切り替える力 ③自分の衝動性を押さえる力 ④ゴールまでを段取る力などの苦手さが代表的な原因として挙げられます。

『単刀直入に言えば、神経発達症のある子は、ロボットでたとえる①～④の回路が故障ないしは不調である状態と言えます。

『「ボタン押してのに反応しないんだよ！」と言っている子に「ボタンを押せ!!」と言っても無意味ですよね。故障・不調機能を補うメカニック的な役割を先生は果たせると良いですね。

